

## 学生研究集録における動向と課題

小池 万喜子\*  
中平 法子\*  
丸山 智津子\*  
丸山 みどり\*

Trend of the studies  
seen in the proceeding of students' reports and future problems

### Summary

In our college, students in nursing department have 180 hours practical training in order to persue the essence of nursing as well as to learn the methods of study. After ten years since the opening of the college, we analysed the reports of student's study. The results are as follows:

1) Classifying the themes of study, we could recognize that some reports dealt with the problems concerning the social or medical topics of the times.

2) Early reports dealt, mainly, with the investigation of the patient's mental state, but recent ones kept an eye on self-insight as a result of their suffering from human relations.

3) The number of students who took part in one theme has increased recently. This showed recent temper of the students, who were diffident and apt to form a group. Some students, however, could not work well in group and caused trouble on human relations.

4) Students selected all kinds of patients including inpatients, outpatients and healthy persons as the subjects of study, so the number of works carried out outside the hospital has increased and various methods of study were adopted.

### はじめに

看護基礎教育課程における総合実習は、現行カリキュラム（昭和42年改正）の看護学総論に位置づけられ、その展開については、各教育養成機関で具体的な検討がなされながら現在に至っている。田島ら<sup>1)</sup>の報告のように実際の展開に当っては、演習、研究、実習として、養成機関により様々に実施されているが、基本的には、総合看護を学ばせたいと志

\*信州大学医療技術短期大学部看護学科

向している。

本学科での「総合実習」は、学生の学習課程、特に臨床実習中の「基礎段階」と「総括」に位置づけられている。総合実習Ⅲは、この「総括」にあたり、「自主的に看護の本質を追求する。看護の研究の方法を学ぶ」ことを目的とし、3年次生の後期に180時間の実習を行っている。これには卒業論文としての意味も含ませ、より総合的に対象や医療状況などについて深く理解し、看護できる能力を養うと同時に看護研究能力を高めることをねらいとしている。保健医療の需要がますます増大し、変動の路を歩んでいる現在、急速に進展する社会の変化に対応できる看護の基礎能力を養うため、「総合実習」もまた、再考の時期に来ていると考えられる。われわれはこの10年間の学生研究集録を分析し、その動向と課題をまとめたので、その結果を報告する。

## 1 調査対象および方法

- 1) 調査対象：学生研究集録の第1回生から第10回生までの272題
- 2) 調査方法：テーマ、研究動機をつかんだ場所、対象、方法、研究場所、参考文献、集録枚数、職種別受持テーマ数について、年度別にその動向を調査する。

## 2 結 果

- 1) テーマについて
  - (1) 学会発表演題による分類（表1）

- ① 成人看護は94題（35%）で、症例研究が主である。

表1 学会発表演題による分類

	51年	52年	53年	54年	55年	56年	57年	58年	59年	60年	合 計
成人看護 A	2	9	7	4	3	6	5	2	3	4	45
成人看護 B	1	8	7	5		4	4	2	5	3	39
成人看護 C	2	1		2	3	2					10
地域看護	1	1	1		2			1	2		8
看護管理					1	1		1	1		4
小児看護	5	6	7	4	5	4	3	3	3	4	44
看護総合	1	6	8	6	5	5	10	8	8	8	65
母性看護	1	2	1	2	1		2		1	1	11
その他老人	1	5		3	1	1	3	2	2		18
細菌	1	1	2		2	2	2	2	3	3	18
H B		1				1		1			3
その他	3	1				1		2			7
合 計	18	41	33	26	23	27	29	24	28	23	272

成人看護A→代謝、内分泌、消化器、泌尿器、生殖器、乳房系疾患の看護に関するもの  
 成人看護B→脳神経、精神、感覚器、骨、関節、筋肉系疾患の看護に関するもの  
 成人看護C→循環器、呼吸器、血液系疾患の看護に関するもの

- ② 小児看護は44題（16％）で、障害児、精神発達、登校拒否、長期療養児、混合保育、遊びなどがある。
- ③ 看護総合は65題（24％）で、看護の見直しのものと、ターミナルケアに関するものを含んでいる。
- ④ 母性看護は11題（4％）で、教授・助教授各1名いるが、テーマとは結びついていない。
- ⑤ 地域看護、看護管理関係は、少ない。
- ⑥ その他、④老人は、高齢人口の増加に伴い、老人の痴呆患者も増加傾向にあり、18題（7％）である。⑥細菌は、18題（7％）で、これは、細菌学の教授がゼミを持ち、その学生がいるため、年次的にテーマ数の変化がなく、内容にも制限がある。⑦その他には、難病、入院費、喫煙が含まれている。難病とは、ある種の疾患群を漠然と指す通俗的な概念であり、50年度までに40疾患の研究班が組織化され、難病と呼ばれていたものに疾患名がついた。52年度までの研究テーマには、難病という

表2 傾向別分類

	51年	52年	53年	54年	55年	56年	57年	58年	59年	60年	合計
細菌・ウイルス	1	2	2	2	4	4	2	4	3	3	27
社会復帰		5	6	2	2	3	3	2	3	2	28
栄養・食事			5	2	2	5	3	1	1	2	21
小児保健	4	4	6	2	5	2	1	2	4	3	33
地域医療(集団 検診)	1	1	1	1	1	1		1		1	8
医療費						1		1			2
看護見直し		2	4	3	3	3	6	3	7	3	34
継続看護	1	7	1	5		2	2	1	1	1	21
老人保健		3	1	2	2	1	3	1	2	1	16
母子保健	1	2	1	1			3		1	1	10
心理(ターミナル ケア)	7	8	3	3	1	5	3	3	3	2	38
意識調査				2	1		1	2	1	2	9
精神・神経			2	1			1	1	1	1	7
中毒・アルコール ・喫煙		1						2	1	1	5
ケーススタディ	3	6	1		2		1				13
合計	18	41	33	26	23	27	29	24	28	23	272

- \* 細菌は、清拭・剃毛・手洗の視点で捕らえている。ウイルスは、HB抗原である。
- \* 社会復帰は、脳卒中・ストーマ・失声・失明・リウマチを含む。
- \* 栄養・食事は、IVH・経管栄養・糖尿病の食事・食欲不振を含む。
- \* 小児保健は、15歳までを対象とする。小児糖尿病・学校保健・障害児・混合保育・遊び・サマーキャンプを含む。
- \* 看護見直しは、便秘・清拭・沐浴・望ましい看護婦像・BP測定・ナースコール・ナイチンゲール・安静・不眠を含む。
- \* 継続看護は、訪問看護・脊髄損傷・難病・胃切除手術後を含む。
- \* 老人保健は、一人ぐらし・寝たきり・痴呆を含む。
- \* 心理(ターミナルケア)は、51・52年は、患者心理・末期患者が中心、数年前よりターミナルケアがでてきた。最近では、自己分析もできている。

漠然としたつけ方がされていたが、その後の研究テーマには、疾患名がそのままつけられるようになっている。喫煙については、昭和57年、年令別構成で20才代の女性喫煙率の増加傾向や、非喫煙者の権利が叫ばれるようになったことから、喫煙に目が向いてきている。

(2) 傾向別分類 (表2)

- ① めだつテーマは、心理、看護の見直し、小児保健、社会復帰、細菌・ウィルスである。
- ② 毎年、平均的に取り上げられるテーマは、心理、小児保健、細菌・ウィルス、看護の見直し、社会復帰、老人保健である。
- ③ 細菌としては、清拭、手洗、剃毛など、無菌操作を看護からの視点で見ている。
- ④ ウィルスは、HB 抗原に関するもので、肝炎・肝癌が、話題となった55年頃から、テーマとして出ている。
- ⑤ 心理は変動しながらも、毎年とりあげられている。その内容として、患者心理をとらえたものが主であるが、58・59年には、自己分析にもとりくんでいる。数年前よりターミナルケアとして、心理面からの追求がされている。
- ⑥ 意識調査は、54年よりみられ、対象は学生、看護婦、医師、介護者と幅広い。
- ⑦ ケーススタディは、51・52年に多く、58年以降は、みられていない。

2) 研究動機をつかんだ場所 (図1)

- ① 病院実習の中で動機を得ているものが、51年から53年は73±5%と多く、54年以降は減少し、50%前後となっている。
- ② 病院以外の施設(保健所・保育所・心身障害者施設・老人ホーム)での見学及び実習で動機を得ているものは、毎年1～4テーマあり、テーマ数中に占める割合としては10.2±7.2%と幅が大きい。
- ③ 社会問題より動機を得ているものは、12.6±8.3%で、51～53年が10%以下であるのに対し、54年以降は10%以上となり、60年のみ4.3%と少ない。
- ④ その他・不明は、22±12.9%で、このうち16.7±13.7%は「はじめに」を読んだ

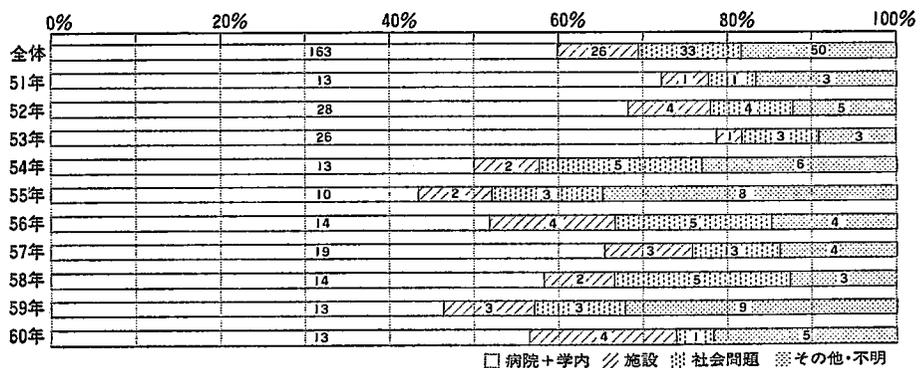


図1 研究動機をつかんだ場所

表3 「はじめに」より動機を得た場所と傾向別分類

	病院・学内	施設	社会問題	その他・不明	合計
細菌・ウイルス	10		1	16	27
社会復帰	22	3	2	1	28
栄養・食事	19	1	1		21
小児保健	5	13	5	10	33
地域医療(集団検診)	3		3	2	8
医療費			2		2
看護見直し	31	1		2	34
継続看護	15	2	2	2	21
老人保健	1	1	9	5	16
母子保健	8			2	10
心理(ターミナルケア)	29	3	3	3	38
意識調査	1	1	2	5	9
精神・神経	5		1	1	7
中毒・アルコール・喫煙	1	1	2	1	5
ケーススタディ	13				13
合計	163	26	33	50	272

限りでは、動機を得た場所が不明のものである。

3) 動機を得た場所と傾向別分類(表3)

- ① 病院・学内で研究動機を得たものは、全テーマ中163題(59.9%)である。
- ② 施設見学等から動機を得たものは、全テーマ中26題で、うち13題(50%)は小児保健である。
- ③ 社会問題より動機を得たものは、ほぼ全ての傾向に見られる。
- ④ 病院・学内で動機を得たものには、ケーススタディ13題(100%)、看護の見直し31題(91.2%)、栄養・食事19題(90.5%)、社会復帰22題(78.6%)、心理(ターミナルケア)29題(76.3%)である。
- ⑤ 学外から動機を得たものは、小児保健28題(84.8%)、老人保健15題(93.8%)、意識調査8題(88.9%)、中毒・アルコール・喫煙4題(80.0%)である。
- ⑥ 社会問題の反映は、医療費2題(100%)、老人保健9題(56.3%)にみることができる。
- ⑦ その他・不明は、細菌16題(59.3%)であり、昨年の研究や他学校の研究を深めたものが含まれている。小児保健10題(30.3%)は、サークル、サマーキャンプへの参加が含まれている。

4) テーマ数と関わった学生数(表4)

- ① テーマ数は、52年の41題を最高に、その後漸減し、25題前後となっている。
- ② 1テーマに関わる学生数についてみると、一人での研究は、51年61%、52年41%、53年24%で、54年以降は10%以下となっている。
- ③ 1テーマに関わる学生数3・4人を合わせると、53年51人(65%)、54年58人(72

表4 総合実習Ⅲのテーマ数と関わった学生数

	51年	52年	53年	54年	55年	56年	57年	58年	59年	60年	合計
テーマ数	18	41	33	26	23	27	29	24	28	23	272
学生総数	25	74	79	81	70	82	77	74	79	81	722
1 テーマ											
1 人	11	17	8	2		1	1		3		
2 人	7	18	10	5	9	9	12	7	6	1	
3 人		3	9	10	4	7	12	8	13	9	
4 人		3	6	7	10	8	4	9	5	13	
5 人				1		2			1		
6 人				1							

%), 55年52人(74%), 56年53人(65%), 57年52人(63%), 58年60人(83%), 59年59人(75%), 60年79人(98%)である。3・4人で研究する者が多い。

## 5) 対象について

## (1) 人・人以外による分類(表5)

- ① 人以外は、細菌、用具の工夫などが含まれている。56~58年では、20%以上を占めている。
- ② 52・53年は、患者が100%を占めているが、54年から患者以外が徐々に増加し、対象が拡大し、あらゆる健康段階にも、広く目が向くようになってきている。

## (2) 対象の年齢構成(図2)

- ① 対象の年齢構成は、成人が一番多い。
- ② 51~54年, 58, 60年は、成人約60%, 小児・老人約40%であり、55年以降は、成人約50%, 小児・老人約50%となっている。

## 6) 方法について(図3)

- ① 51~54年では、症例研究が50%以上を占め、55年以降は、調査研究が増加している。
- ② 57~59年は、文献研究が約15%を占めている。
- ③ 実験研究は、51~59年5~10%を占め、年次変化はみられていないが、60年には、16%を占めている。その内容として、従来細菌学の実験が主であったが、60年には、

表5 人・人以外による分類

	合計	51年	52年	53年	54年	55年	56年	57年	58年	59年	60年
人以外	42	1	3	3	3	4	7	6	6	3	6
人	230	17	38	30	23	19	20	23	18	25	17
患者以外	29	3			2	5	3	1	4	7	4
患者	201	14	38	30	21	14	17	22	14	18	13

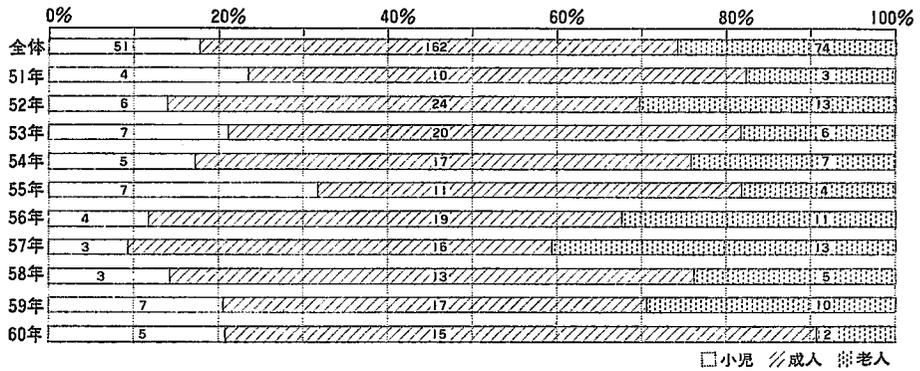


図2 対象の年齢構成(複数回答)

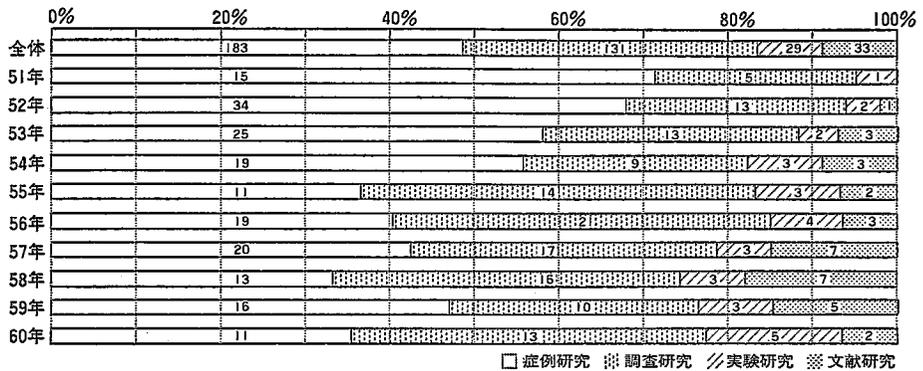


図3 方法(複数回答)

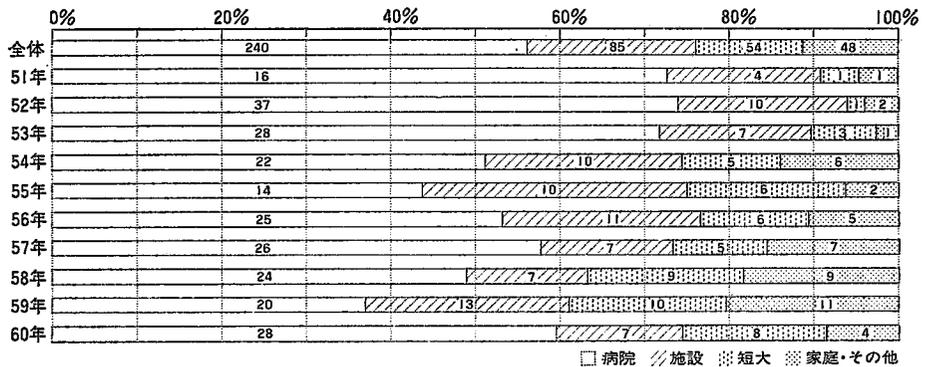


図4 研究場所

エネルギー消費などの実験も行われている。

7) 研究場所について (図4)

- ① 51～53年は、病院が70%以上を占めており、その後は60%以下に減少している。ちなみに59年は40%を割っている。
- ② 施設は老人ホーム、保育園、心身障害児施設、リハビリ施設などであり、その比率は20%前後を保ち、年次変化が少ない。
- ③ 短大は、54年以降、10%を越え、20%に近づいている。
- ④ 家庭・その他は、51～53年は5%以下であったが、54年以降漸増しており、59年には20%を越えたが、60年は9%である。

8) 参考文献

- ① 参考文献数 (図5-1) は、51～54年は0がみられるが、55年からは全てのグループが文献を記載し、1テーマ当り、最低1件、最高175件である。文献数1～10件が、75±15%と多く、平均1テーマ7.6件である。
- ② 文献総数における単行本と雑誌の割合 (図5-2) をみると、51～53年は単行本が半数以上を占めているが、54年からは逆転し、雑誌が増え59年には65%が雑誌となっている。
- ③ 雑誌の件数 (図5-3) は、総数1049件で、看護系雑誌は、761件 (72.5%)である。看護系雑誌の占める割合は72.5±10.5%である。年度別にみると、51～52年は80%以上を占め、53年以降は減少しているが、最低でも62%以上が、参考にしてゐる。
- ④ 雑誌の所在 (図5-4) は、参考文献としてあげられている雑誌名と当時公費で購入されていた雑誌リストを照らし合わせて推察したものであるため正確なデータとは言えないが、約50%の雑誌が、図書館所在のものと一致する。その他には、他学科教官、中央・医学部図書館、国会図書館、学生個人の所有のもの等が含まれ、

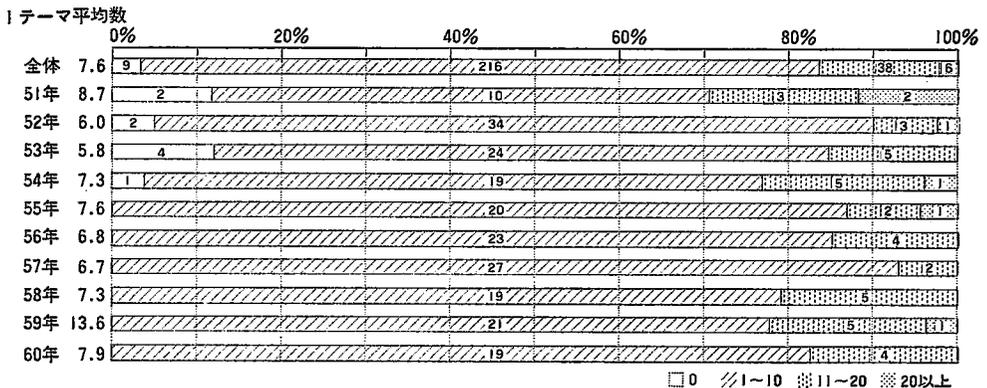


図5-1 参考文献数

\* 参考文献では、同一雑誌名で内容の異なる文献が記載されるため、単位を種類数と件数に分けた

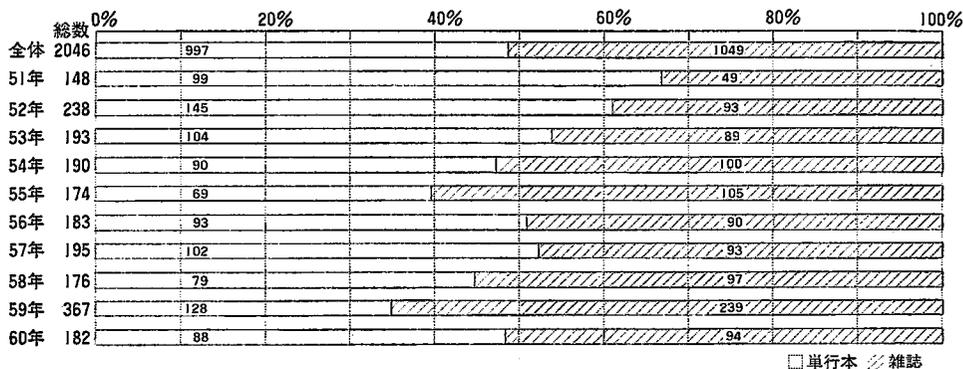


図5-2 単行本と雑誌の割合

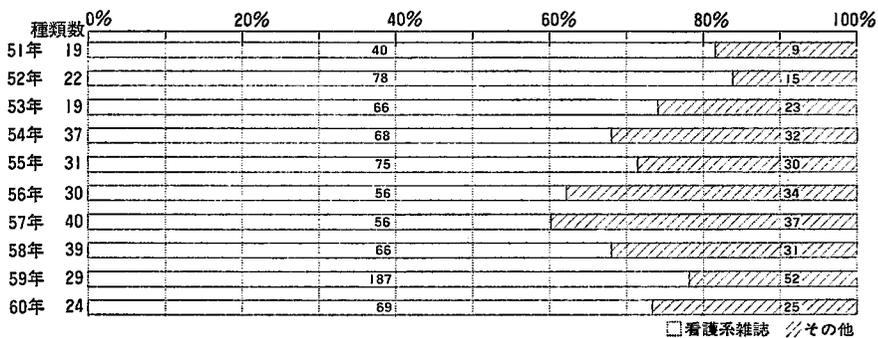


図5-3 雑誌の件数

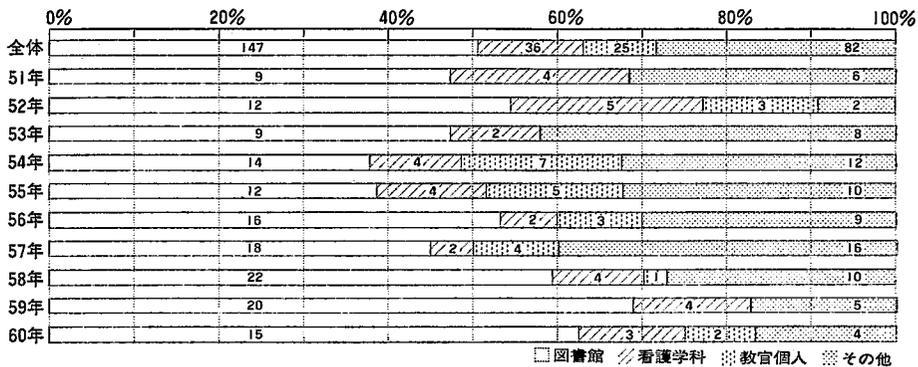


図5-4 雑誌の所在

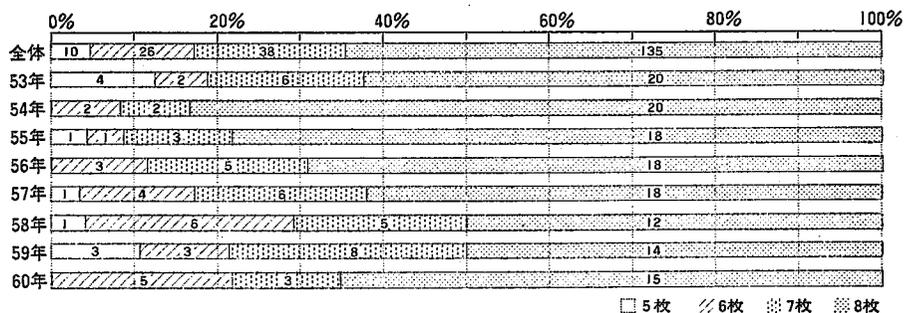


図6 集録枚数

- \* 1枚1,760字。1テーマ8枚以内と制限している。
- \* 51・52年は、400字詰原稿用紙で、制限なしとしていたため集計から除いた。
- \* 9枚以上の、4テーマは除外した。

表6 1テーマ学生数と集録枚数

集録枚数	学生数	人数					
		1人	2人	3人	4人	5人	6人
5枚	1枚	1	5	3	1		
6枚	1枚	1	9	9	7		
7枚	1枚	3	11	17	6	1	
8枚	1枚	10	33	41	48	2	1

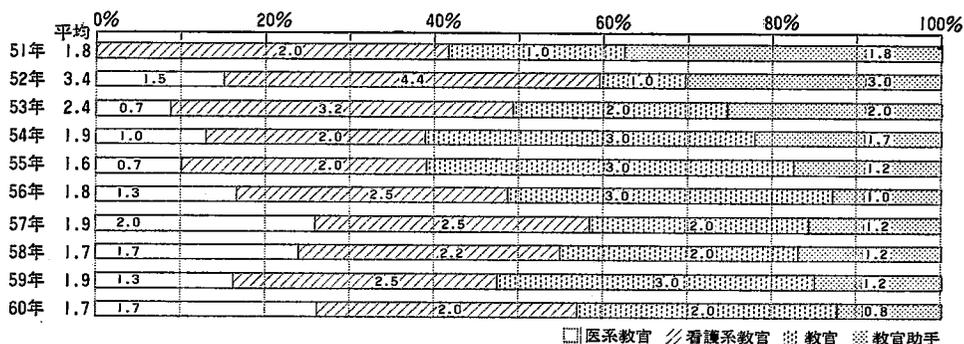


図7 職種別受持ちテーマ数

- \* 医学系教官は、教授のみ。
- 看護系教官は、教授・助教授・講師である。
- 教官とは、細菌学で、医学系にも看護系にも属さない。

53年は42.1%が、その他の分野からの雑誌である。

#### 9) 集録枚数

- ① 集録枚数（図6）8枚を使用しているテーマ数は、年々減少傾向にあり、5～7

枚でまとめるものが増加している。58・59年は、50%までが7枚以下である。

- ② 1テーマに関わる学生数と集録枚数の関係(表6)をみると、学生数にかかわらず、8枚が一番多く、約60%を占めている。1人で8枚から4人で5枚というのまであり、単純に一人あたりの枚数をわり出すと、8枚から1.2枚と大きな幅となる。

#### 10) 職種別担当テーマ数(図7)

- ① 医系教官教授は51年は担当せず、55年までは、担当数が少ないが56年からは教官助手と逆転し、やや増えている。しかし、57年以外は常に平均数以下である。
- ② 看護系教官は、10年間常に2テーマ以上、最高4.4テーマを担当している。
- ③ 教官(細菌学)は、ゼミの学生が、その教官のもとで実験研究を行うことが多いので、テーマは一定している。

### 3 考 察

1) 研究テーマは学生の興味や関心のあるものを自由に選んでいるが、難病、ターミナルケアなど、その時々医療事情を反映したもの、老人看護、入院費、喫煙など社会情勢に対応したもので、学生は、その時々社会問題を敏感に受けとめている。

2) 母性看護をテーマとする学生が少ないが、とりあげなければならない問題も多いと思われるので、この領域に目を向けさせることを考えなくてはならない。

3) 微生物の実験研究は、微生物の教授がゼミを持っている関係で数が一定している。

4) 社会復帰では、ストーマ、失声、乳癌などの各種の患者会への参加や、これらの障害に対する医療従事者の積極的なとりくみが、学生への刺激となり、テーマとしてあげられている。

5) 心理では、患者心理の探求に加え、自己洞察が行われるようになって来ているが、この背景には、看護が人間関係としてとらえられ、相手を知るためには自己を知ることが重視されてきていることと、良い人間関係がつかれず悩む学生の増加等があると思われる。

6) 1テーマに関わる学生数が、4人以上であると、各自の参加意識が薄れ、責任が曖昧となり、総合実習Ⅲの目的である「自主的に看護の本質を追求する」という姿勢から遠ざかるように思われる。1テーマに関わる学生数の増加には、一人では自信が無いからグループをつくるという学生の気質の変化が反映している。しかし、グループをつくっても、グループワークができず、グループ内で人間関係のトラブルをおこすといった問題も生じはじめています。テーマ・方法との関連があり、更に研究数が増すと、一教官の担当数が増えることになり、指導の可能性ともあわせて考えなければならない。

7) 研究対象と場所についてみると、51~53年は、入院患者を対象としていることが多いため、病院が70%以上、短大・家庭・その他が10%前後であったが、その後、病院が減り、59年には、病院が37%、短大・家庭・その他が39%となり比率が逆転している。これは、あらゆる健康のレベルにある人、特に在宅患者など施設外の人々へ目が向けられるようになった看護界の動向とも、ほぼ一致しており望ましい方向だと思われる。

8) 研究方法は、1事例を対象としたものが減り、アンケート、面接などの調査研究、文献研究が増えているが、これは各論実習で受け持ち看護をしているため、そこで経験出来ない看護の側面に目を向けたものと考えられ、視野を広げ、より看護の本質を追求するためには好ましい傾向と考える。

9) 研究動機をつかんだ場所と方法の動向についてみると、54年までは、病院で動機をつかんだ割合と、症例研究の割合は、ほぼ一致している。同様に、研究場所とあわせてみると、54年までは、病院で動機をつかんだ割合と、病院で研究している割合と、ほぼ一致している。53、54年を境に、変化があったように思われる。

10) 参考文献の内容は、54年以降、単行本より雑誌の割合が大きくなり、より新しい情報を得ている。雑誌は、総数1049件で、99種類と多岐にわたり、年平均30種類の雑誌が使用されている。99種類のうち看護系雑誌は26%で、看護系雑誌より他の分野の文献が多く使われている点も、幅の広さを思わせる。

11) 参考文献の50%前後の雑誌が、図書館所在のものとも一致することからも、図書の充実の必要性が理解される。その他・学外からも広く文献を求めているが、これは教官による「文献の求め方」の指導によるところも大きいと思われる。

12) 集録枚数が、研究の質をあらわすとはいえないが、学生数の違いは、学生の力量、責任の分散も考えられ検討の必要がある。集録枚数6枚以下は36題である。研究方法との関係を見ると、実験研究は10年間で23題あり、うち13題は6枚以下で56.5%である。症例・調査・文献研究中、6枚以下のものは、各々10.8±3.1%である。研究方法により、集録枚数にかたよりがみられている。

## おわりに

今後、「看護の本質を追求する」ために、テーマ選定には、学生に助言すると共に、1テーマに関わる学生数については、研究後の発表とも合わせて検討を必要とする。「看護の研究方法を学ぶ」については、指導者がどれだけ学生と関わっているかを内省し、学生が満足する指導をして行きたい。

## 文 献

- 1) 田島桂子他：現行カリキュラムにおける専門科目（看護学）の教授状況に関する実態(第2報)、第13回日本看護学会集録、日本看護協会出版会、1982
- 2) 厚生統計協会：国民衛生の動向・厚生指標・特集 1984
- 3) 鈴木啓子他：本学の看護研究集録にみる10年間の動向と今後の課題、第14回日本看護学会集録、日本看護協会出版会 1983
- 4) 山口瑞穂子：総合実習の方法と問題点、看護展望 Vol.9 No.7 1984
- 5) メジカルフレンド社編集部：総合実習についてのアンケート調査結果、看護展望 Vol.9 No.7 1984
- 6) 土屋三千代他：事例研究指導の再検討、看護展望、Vol.10 No.10 1985

(1986年9月30日 受付)